

バウハウス(デッサウ)

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

ヴァイマルで国立の建築・芸術学校としてスタートしたバウハウスはヴァルター・グロピウス校長以下錚々たる教授陣を揃え、一見順風満帆のスタートを切ったかのように見えた。しかし実情はそうではなくバウハウスが社会民主党、共産党から支援を受けていたことに右翼や保守主義者は反発していた。1924年2月10日のチューリンゲン地方の選挙結果で右翼・保守政党が勝利を得、バウハウスに閉校を要求するようになった。1924年3月20日には国民教育大臣で首相であったリヒャルト・ロイトホイサー(Richard Leutheuser)がグロピウスに解雇通告を出すにいたった。かつバウハウスの予算を大幅に削減するようになった。バウハウスの教育は既にな有名になっていたのも、いくつもの市がバウハウスの事業を継続するように誘いがあった。その中で最後まで一番熱心な町がデッサウ(Dessau)市であった。デッサウは社会民主党が政権を取っており市長のフリッツ・ヘッセ(Fritz Hesse)はバウハウスを応援していた人であった。このようにしてバウハウスは国立から市立の学校になる。デッサウは航空機や機械製造を行っていたユンカース(Junkers)^{註1)}の工場があったり、第二次世界大戦前までドイツ最大の化学会社であったイーゲーファルベン(IG Farben)^{註2)}があった。またそこに労働者が集まり住宅が不足していた。その事から住宅の近代化を唱えていたバウハウスの招致に熱心であった。

1. デッサウのバウハウス館

グロピウスが唱えていた「バウハウスは簡単な家財道具から完成した住居まで一貫した作業を実施するべきだ」という主張を実行に移す機会を得たのである。そして1925年4月1日デッサウに移住後、この作業に取り掛かった。この結果完成したのが写真1のデッサウ・バウハウス館である。この写真は南西から撮影したもので、工房翼部(Werkstattentrakt)と呼ばれている。ルドルフ・



写真1 デッサウ・バウハウス、工房棟、南西面

アルンハイム(Rudolf Arnheim)はこのバウハウス館について1927年に「清潔さと明確さと広大さを目指したことが勝利した。大きな窓を通じて外部から、人々が働いている様子、また休憩でくつろいでいる様子を伺うことが出来る。どこの部分でもその構造が明らかであり、ネジ釘一本も隠されていないし、彫刻のひとつも素材の不明なものはない。この正直さが倫理であると考えたくなる。」と書いている。

写真2にヴァルター・グロピウス、ハルネス・マイヤー、ミース・ファン・デル・ローエが執務していたバウハウス館校長室の内部を示す。写真3にバウハウス館の内廊下を示す。また写真4にバウハウス館の外気に面するガラス窓を示す。このようにガラスを多用したのがこの建物の特徴である。外気に面するガラス窓には自然換気用に開閉できるガラス窓も設けられた。これを写真5に示す。建物中央には中央階段がある。これを写真6に示す。バウハウス館には講堂がある。この講堂の椅子を写真7に示す。この建物の家具調度はブロイヤー(Breuer)の指導の下、家具製作所(Tischlerei)が行った。意匠の点で話題を呼んだのは、この時に初めて公開されたスチールパイプの家具であった。ブロイヤーは自転車のハンドルからヒントを得た。そして地元の有力企業ユンカースと組み、スチールパイプを曲げて座面と背面には布地を貼ったのである。当時は椅子は木製が殆どであった事が



写真2 バウハウス館、校長室



写真3 バウハウス館の内廊下



写真4 バウハウス館の外気に面するガラス窓



写真5 自然換気用に開閉できるガラス窓



写真6 中央階段



写真7 講堂の椅子

ら、スチールパイプの家具は「座敷機械」(Sitzmaschine)と呼ばれた。この講堂の照明を写真8に示す。照明器具の意匠は全て金属工房で制作された。その多くはマックス・クライエヴスキー(Max Krajewski)とマリアンネ・ブランド(Marianne Brandt)のアイデアによるものであった。また標識は印刷工房が製作した。「全ての芸術が力を合わせて建築に結集する」というグロピウスのバウハウスの理想がここで実現されたのである。講堂の照明

について解説したが、一般廊下などにも優れた照明器具が用いられている。これを写真9に示す。

2. デッサウのバウハウス教師館

新しいバウハウス館から徒歩で行けるエーバート通り(Ebertallee)に沿った松林の中に、グロピウスはデッサウ市から拠出された資金を使用して教師館(マイス



写真 8 講堂の照明器具



写真 9 廊下の照明器具



写真 10 グロピウスが住んだ校長邸



写真 11 「グロピウスが 1925 年から 1926 年に建設した教師宿舍」と書いた堀



写真 12 カンディンスキーとパウル・クレーが住んだ住宅



写真 13 ムッヒエとシュレンマーが住んだ住宅

ター宿舍：棟梁館)を建設することが出来た。ここにはグロピウスが住んだ校長邸(写真10)もあった。これは教師館見学の為の切符売り場、コーヒーショップとしても

使用されていたが老朽化が進み、近年取り壊された。校長邸のすぐわきに「グロピウスが1925年から1926年に建設した教師館」と書いた堀がある(写真11)。教師館は



写真 14 モホリ・ナギとファイニンガーが住んだ住宅

3 棟あり、二人の教師(棟梁)が共同で 1 棟の住宅に住んだ。写真12にカンディンスキー(Kandinsky)^{註3)}とパオル・クレー (Klee)^{註4)}が住んだ住宅、写真13にムッヒエ(Muche)^{註5)}とシュレンマー(Schlemmer)^{註6)}が住んだ住宅、写真14にモホリ・ナギ(Moholy-Nagy)とファイニンガー (Feininger)^{註7)}が住んだ住宅を示す。教師館は 2 戸建住宅の平面図が90度の角度で対称になっており、グロピウスの主張する「大型の積み木」の良い例となった。「至る所に同じ合理的な水平の層、同じ平屋根、枠のないドアや窓が見せる鋭い直線、アトリエのガラス壁がそれをいやが上にも強調する。実用本位の居住の為の機械。だがその冷たく画一的な存在の中で、まだ伐採されていない木々の周りを取り巻く光と影の戯れが、心地よい芸術効果をあげているのだ」と女流評論家ファニーナ・ハレは1929年13号の芸術新聞(Kunstblatt)に書いている。教師館を含めバウハウス館はユネスコの世界文化遺産に登録されている。

3. バウハウスにおける女性の活躍

ヴァイマル時代の伝統を引き継ぎ多くの女性がデッサウ校でも学んだ。図 1 の中央階段での女学生のモンタージュ写真がこの事を示している。この写真はファイニンガー (Lux Feininger) によって撮影されたが、1927年頃の作品である。この写真は文献 6 の裏表紙に使用されている。このようなモンタージュ写真はイッテンの後任として予科課程を担当したラスロ・モホリ・ナギが開発した技術で、バウハウスの印刷工房によりボス



図 1 ルクス・ファイニンガー制作のバウハウスの女子学生⁶⁾

ター等が量産されるようになった。当時としては画期的な事であった。バウハウスで学んだ女性がバウハウスの教師になった例もある。マリアンネ・ブランドとグンタ・シュテルツルである。

・マリアンネ・ブランド(Marianne Brandt,1893~1983)

ケムニッツ生まれ。旧姓はリイーベ。1911年から1917年までヴァイマルのザクセン大公立造形大学で絵画と彫刻を学んだ。1924年1月から1926年7月まで、バウハウスに学ぶ。アルバースとモホリ・ナギの基礎講座、クレーとカンディンスキーの講義を受ける。金属工房に入り、銀細工の見習いとして徒弟契約を結ぶ。1927年4月から金属工房の助手。1928年4月から1929年9月までその代表。バウハウスの金属工房で最も才能に恵まれた一人であった。銀器セットのポットを始め卓越した作品を作りだした。バウハウスが工業デザイン路線をとった後も彼女のデザインしたランプはバウハウスの最高傑作の一つである。⁴⁾

ブランドの製作したランプを図 2 に示す。

・グンタ・シュテルツル(Gunta Stölzl,1897~1983)

ミュンヘンに生まれる。1914年から1916年までミュンヘン工芸学校に学ぶ。1919年10月から1925年までバウハウスで学ぶ。イッテンの予科課程、パウル・クレーの授業を受け、織物を専攻した。1925年10月から1931年9月までバウハウスの教壇に立つ。織物部の女性工房マイスター (Werkmeisterin der Weberei) となっ

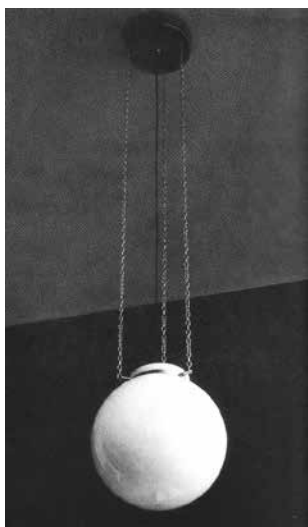


図2 バウハウス女性マイスター
マリアンネ・ブランド(Marianne
Brandt,1893～1983)が製作した吊
り下げランプ⁴⁾



図4 デッサウ・テルテンの住宅団地⁴⁾

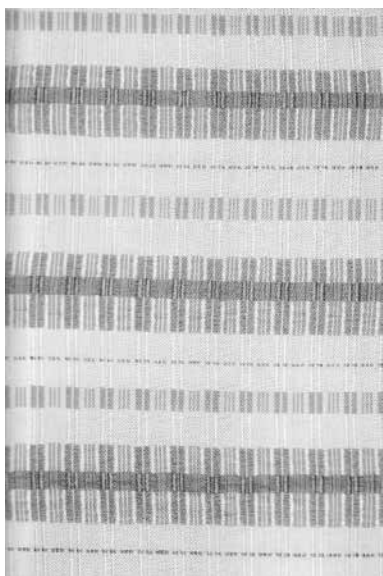


図3 バウハウスの女性マイスター、グンタ・
シュテルツルの製作した織物「カバー」⁴⁾

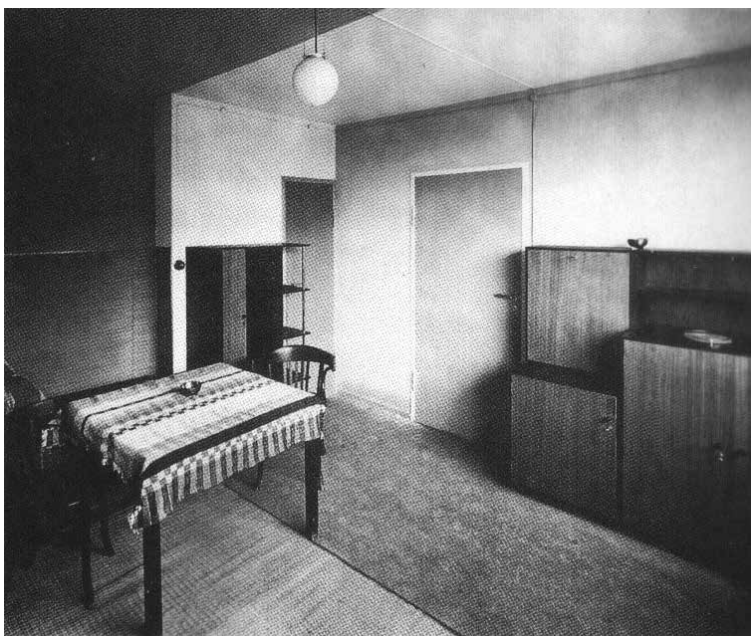


図5 団地内の住宅内部。様々な着色され磨き上げられた規格化された家具が配置されて
いる。⁴⁾

た。バウハウスの最も重要な織物技術者であった。造型的な芸術作品から近代工業デザインへという織物の歴史と共に歩み、作品の製作を行った。シュテルツルの最もすぐれた作品の一つは柄織じゅうたんで、これはヨハネス・イッテン、やクレーの授業で学んだ形態を織物へ応用したものである。⁴⁾

バウハウス女性マイスターのシュテルツルが製作した房付のカバー(118×100cm)を図3に示す。白と緑の色

彩のコントラストのほかに、無光沢のウールと光沢のある人絹を使用し、材質のコントラストも取り入れている。このカバーは幾通りか製作された。

他にバウハウスで教鞭を取った女性教師(Meisterin)には音楽教育家であったゲルトルート・グルノウ(Gertrud Grunow,1870～1944)とインテリアデザイナーであったリイリー・ライヒ(Lilly Reich,1885～1947)がいる。彼女たちはバウハウスの教育は受けていない。



図6 ヘルバート・バイヤー(Herbert Bayer)が作成した建築家ベルチ教授が行う講演会のポスター⁴⁾



図7 アンドレアス・ファイニンガー(Andreas Feininger)による「若者はバウハウスにやって来る」というバウハウスの宣伝ポスター⁶⁾



図8 ヘルバート・バイヤー製作によるモンタージュ写真⁶⁾



図9 モホリ・ナギがデザインしたバウハウス叢書のカバー「グロピウス・デッサウのバウハウス建築」⁴⁾

き上げられた規格化された家具が配置されている。⁴⁾

4. バウハウス・デッサウにおける作品

・デッサウ・テルテン団地(Siedlung Dessau Törten)
バウハウスがデッサウに開校した記念としてテルテン団地がつくられた。第1期工事は1926年に1戸建が60戸建設された。団地計画、個々の建築がグロピウスの作品であった。庭付きの平屋建て住宅であったが、後になって3階建ての事務所建築なども追加された。当時デッサウには労働者が集まり、住宅が不足していた。グロピウスは初めて自分の住宅供給と設計理念を、住宅不足解決策として提案することが出来た。工場で資材を予め製造したり規格化し現場作業を合理化した。この住宅で使用された家具調度品はバウハウスで整えることが出来た。居間と食堂を一体化する工夫も行われた。第2期工事は1917年に100戸、第3期工事は1928年に156戸が完成した。そしてこれら住宅は一般労働者でも手が届く価格であった。図4にデッサウ・テルテンの住宅団地を示す。また図5に団地内の住宅内部を示す。様々に着色され磨

5. バウハウスの啓蒙雑誌・印刷技術

ヴァイマルのバウハウスで「美術印刷部」と呼ばれた部門はデッサウで「印刷工房」となり、さらに『印刷と広告の為の工房』(Werkstatt für Druck und Reklame)と改められた。ここではゴシックに似た全ての線が同じ太さで、装飾線もなく描く文字が使用され、バウハウスの特徴的な字体となった。例としてヘルベルト・バイヤー(Herbert Bayer)が作成した建築家ベルチ教授が行う講演会のポスターを示す(図6)。ここではヴァイマル時代に予科過程のマイスターであったラスロ・モホリ・ナギが開発してきた寫真技術、モンタージュ写真なども大いに成果をあげた。図7にアンドレアス・ファイニンガー(Andreas Feininger)による「若者はバウハウスにやって来る」というバウハウスの宣伝ポスターを示す。この写真はグロピウスの後任校長となったハルネス・マイヤーによりバウハウスの宣伝パンフレットカバーデザインとして使用された。また図8にヘルベルト・バイヤー製作によるモンタージュ写真の例を示す。



図10 ファルカス・モルナールが表紙のデザインを行い、グロピウスが編集した「国際建築」の表紙⁴⁾



図11 1931年ヨースト・シュミット(Joost Schmidt, 1893～1948)はデッサウ市のパンフレットの裏表紙に立体遠近法を用いてデザインした。航空写真に地元ユンカーズ社の大型航空機、ヴェルリッツ公園(Park Wörlitz)まで当時のデッサウ市を代表する事物が示されている。⁴⁾

バウハウスでは叢書を発行したり、啓蒙の雑誌(バウハウスの書籍“Bauhausbücher”)を発行した(図9)。この叢書のシリーズとして“Internationale Architektur”(国際建築)という雑誌も発行された。図10はファルカス・モルナールが表紙のデザインを行ったもので、編集はグロピウスである。国際建築の動きは日本にも波及し、1927年関西に上野伊三郎らを中心に「インターナショナル建築会」が創立された。この会は1929年に機関紙「イ

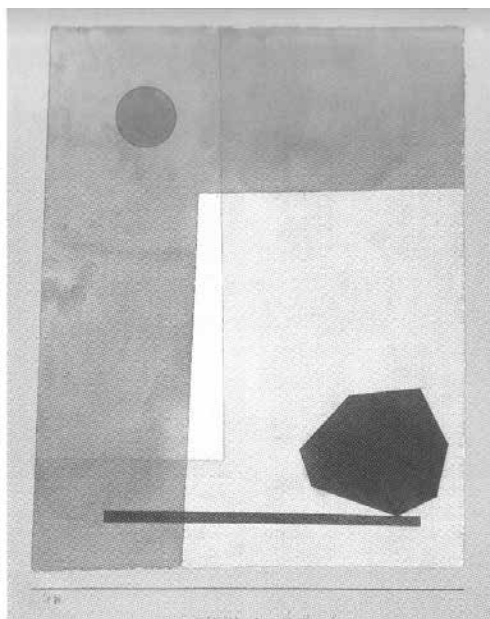


図12 クレーの作品⁶⁾

ンターナショナル建築」を創刊するようになる。海外の会員としてグロピウス、ブルーノ・タウトも含まれていた。ナチスを逃れ来日したブルーノ・タウトはインターナショナル建築会会長の上野伊三郎から得た招待状により日本国のビザを取得し、来日したのである。

1931年ヨースト・シュミット(Joost Schmidt, 1893～1948)はデッサウ市のパンフレットの裏表紙に立体遠近法を用いてデザインした。航空写真に地元ユンカーズ社の大型航空機、ヴェルリッツ公園(Park Wörlitz)まで当時のデッサウ市を代表する事物が示されている(図11)。

6. クレーとカンディンスキーの教育

クレーはデッサウでは予科課程の第3学期の授業を担当した。ヴァイマル時代に輪郭が出来上がっていた「造型的形態論」で、色球を用いて実演する色彩論も含まれていた。また織物工場の女性たちに形態論を教授した。クレーが描いた作品を図12に示す。またバウハウスの雑誌の編集を担当していた作家のエルンスト・

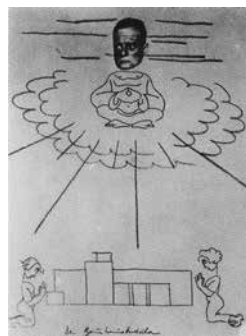
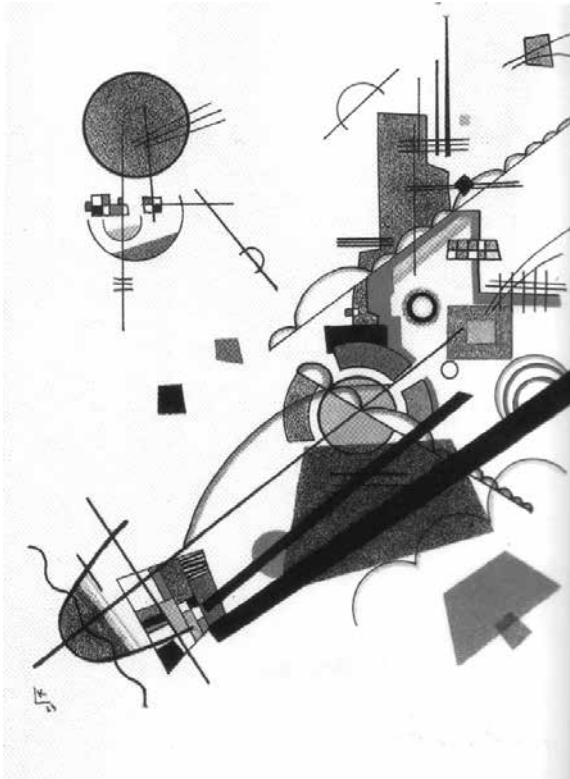


図13 仏陀姿のクレーに合掌する女子学生の戯画⁴⁾

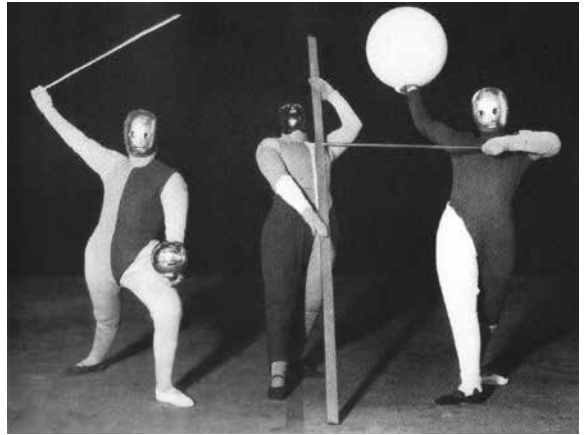

 図14 カンディンスキーの作品⁴⁾

カールライ(Ernst Kallai)は仏陀姿のクレーに合掌する女子学生の戯画を描いている(図13)。クレーはバウハウスに批判的でありながら共に考えるという態度を示し学生から見て仏の存在であったのであろう。

一方の大家カンディンスキーの授業も形態論の分野であった。クレー同様1927年から自由絵画教室を受け持った。ベルリンのバウハウス資料館にはカンディンスキーが教えた学生の演習課題が残っており大きく4つのグループに分けられるという。色彩はゲーテの色彩論を踏襲し、出発点は三原色の赤、青、黄、それに黒、白を加えたものであった。「青と黄の組み合わせが最も強いコントラストをなす」としたのもゲーテの色彩論によったものである。カンディンスキーの作品を図14に示す。

7. バウハウスの舞台芸術

この教育はヴァイマル時代にヨハネス・イッテンが始めた。イッテンは「演劇は祝祭となり祝祭は労働となる、そして労働は演劇となる」というグロピウスのスローガンのもと講義を行った。デッサウではオスカー・シュ


 図15 シュレーマーが指導した形態ダンス、(1927年)⁴⁾

レーマー(Oskar Schlemmer,1888~1943)が授業を担当した。シュレーマーが指導した形態ダンスを図15に示す。

8. 校長ハンネス・マイヤー

バウハウスの新館が完成した1年後まさにバウハウスは名声の絶頂にあり、国際的にも評判は高かった。その1928年初めにグロピウスが校長の辞職を表明した。グロピウスのいないバウハウスの存在は考えることが出来ず学内の動揺は大きかった。グロピウスは「新しい仕事をしたい」というのが辞意の理由であった。しかしバウハウスの経済状態は悪く、グロピウスは校長としてそ


 図16 1927年全ドイツ労働組合総同盟研修学校建設現場を視察するハンネス・マイヤー⁴⁾

の苦悩を抱えていた。デッサウ市はバウハウスを招致しながら十分な予算を付けなかった。バウハウスの作品を販売する事で、学校運営をしなければならなかった。それにしても新しい製品は当時必ずしも国民に受け入れられなかった。しかも工場の技術に未熟な点もあった。またもともと教員から給与が安いと言われていたところに更に10%の給与削減を依頼しなければならなくなり心労は極限に達していたようである。グロピウスは後継者としてスイスの建築家ハンネス・マイヤー(Hannes Meyer,1889~1954)(図16)を指名してバウハウスを

去った。マイヤーの前任者はグロピウス、後任者はミース・ファン・デル・ローエという世界の四大建築家に数えられる人物の間に入ってしまう一見影が薄い。しかし校長としての在任期間は1927年4月から1930年8月までと、後任者であるミース・ファン・デル・ローエよりも数ヶ月長い。マイヤーは「ぜいたく品よりも大衆品を」というスローガンを掲げ、バウハウスの再興に努力した。建築の工業生産、プレハブ化、さらに規格化に重点を置いた。マイヤーは学長に就任するや、内部構造の徹底的な変革を行った。1928年1月に構造改革に関する討論会を集中的に行った。これには学生も加わり、基礎教育の拡充を含む、改革が行われた。しかし本人が徹底した共産主義者であったことから右翼の扇動もあり、デッサウ市から1930年7月に解任されてしまう。代表作品にはベルリン市郊外のベルナウにある「全ドイツ労働組合総同盟研修学校」がある。

9. 校長ミース・ファン・デル・ローエ

前任者マイヤーが学生も含めて討議を行い、改革を進めたのに対し、ミース・ファン・デル・ローエはすでにドイツ前衛建築家として認められた存在であった。それだけに学生の存在を無視し決定をすることが多かった。その為に学生の反発を受け、ストライキなども受けた。しかしこれもデッサウ市長の協力を得て高圧的な態度で学生を退学処分にするなどして乗り切った。グロピウス、マイヤーが工房での作業と訓練を建築を学ぶまでの通過点として重視したのに対し、ミースは工房での教育訓練を経ずに建築教育に入れるように変化させた。ミースは学生の設計に対する要求も高く、学生もこれに応じてミース風の設計を行うようになった。この結果極めて短期間の教育であったのもかわらず、ミース学派とも呼ばれる一派ができるようになった。その学生達、例えば、ヘルバート・ヒルヒェ (Herbert Hirche)、ヴィルス・エバート (Wils Ebert)、エデュアルト・ルートヴィッヒ (Eduard Ludwig)、ゲアハルト・ヴェーバー (Gerhard Weber)ら大学教員となったりして、1954年以降ミースの思想と美学を世の中に広める努力をした建築家が育った。ミースのそのような努力の内にもドイツ国内では徐々にナチス党が正式な選挙で勝利を収め勢力を持ってきた。1931年10月25日にバウハウスがあるデッサウで選挙で勝利した。その時の公約がバウハウスを閉鎖するというものであった。バウハウスでは前の校長が共産党



図17 バウハウスへの打撃、留学生山脇巖作のコラージュ、1932年。

員であったと言う事もあり、学生の中にもナチス党が目の敵とする共産党員は多数いた。またドイツ国民が困窮状態にあるのに、外国人教師を多数抱えているバウハウスに補助金を出すのはおかしいと言うのがバウハウス攻撃の材料であった。バウハウスの業績は高く評価されていたので、ライプツヒ市などバウハウスを誘致しようとした自治体は有ったそうである。しかし校長ミース・ファン・デル・ローエは自費で社会民主党の勢力が強いベルリンで土地、建物を調達し、そこへ脱出を計画した。バウハウスへ夫人と共に留学していた山脇巖はナチスの弾圧に抗議して「バウハウスへの打撃」というコラージュを作成した(図17)。1932年ナチスが政権を取る1年前の1932年の事であり、大変に勇気のある仕事であった。

おわりに

バウハウスが最も花開いたデッサウ時代、後世から見れば素晴らしい時代のように見える。しかし、実際はそうでなく、校長を引き受けたグロピウス、マイヤー、ミースの苦悩は並大抵のものではなかった。バウハウスが活

躍した時代はヴァイマル共和国時代である。フーゴ・プロイスにより草案が練られたヴァイマル憲法は極めて民主的で素晴らしい内容であった。しかし政権は安定せず、頻繁に交代をしていた。一般労働者の生活は特に激しいインフレーションにより、困窮状態であった。このような時に愛国主義者・国粹主義者が台頭してきて国民の支持を得るものである。ナチス党も正式な選挙で勝利し、政権を手中にした。日米開戦を決定した御前会議に出席していたことにより、元企画院総裁の鈴木貞一は連合国の極東裁判(東京裁判1946~48年)によりA級戦犯として終身刑を受けている。釈放後「敗戦は我々の責任では無い。我々がけしからんと言って憤慨するのは少し筋違いでないか。国民が戦争を本当に欲しないと言う、それ(民意)が政治に強く反映しておれば、できない。政治の力が足りなかった。(中略)政治家は一人で立っているわけではない。国民の基盤の上に立っている。」と述べている。このような発言はドイツにおける戦犯も同様である。

註1) ユンカース(Junkers、戦前はユンケルスの表記も見られた)は、ドイツの航空機・エンジンメーカーである。正式な社名はユンカース航空機・発動機製作株式会社(Junkers Flugzeug- und Motorenwerke AG)。前身は1895年にフーゴ・ユンカース(Hugo Junkers)が設立したボイラーおよびラジエータ製造を手がけるユンカース&Co温水器製造社(Junkers & Co. Warmwasser-Apparatefabrik)。第一次世界大戦を通じて全金属製航空機製造大手へと成長し、第二次世界大戦ではドイツ空軍へ軍用機を供給した。フーゴ・ユンカースはドイツの技術者・発明家・実業家で、全金属製の飛行機、初期の高速ディーゼルエンジン開発の先駆者として知られる。エンジン技術者として成功を収め、アーヘン工科大学で教鞭を執った経歴もあるが、航空機の世界に関わりだしたのは中年期以降である。

固定翼飛行機の実用化から間もない1900年代後期に、いち早く全てを金属で構築した厚翼単葉構造の特許を申請するなど、先駆的な技術を着想した。第一次世界大戦中には先例の無かった全鋼鉄製の戦闘機を開発、終戦後には世界初的全ジュラルミン製輸送機の開発に成功した。ユンカース式のジュラルミン機体は、軽量さと頑丈さを両立したことで、次世代の全金属モノコック構造が出現する1930年代初頭までは最も先進的な存在であった。

註2) IG・ファルベンインドустリー(イーゲー・ファルベンインドустリー、I. G. Farbenindustrie AGもしくはInteressen-Gemeinschaft Farbenindustrie AG)は、かつて存在したドイツの企業。第二次世界大戦前のドイツ化学産業を独占したトラストである。略称はIG・ファルベン(I. G. Farben)。1904年、バーデン・アニリン・ウント・ソーダ工業(BASF)、フリードリッヒ・バイエル染料会社(バイエル)、アニリンファブリカツィオン(アグファ)の三社は三社同盟を結成し、同盟関係を形成した^[1]。この三社は第一次世界大戦において毒ガスの製造を請け負ったことで知られる^[1]。1916年には三社同盟に加え、ヘキスト、グリーンスハイム・エレクトロン(ドイツ語版)など6社が「ドイツ染料タール利益共同体」(Interessengemeinschaft der deutschen Teerfarbenfabriken)を形成し、ドイツの化学・染料業界を支配するようになった。

註3) ヴァシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky、1866

~1944)モスクワに生まれる。1886年~1892年まで、モスクワで法律と国民経済学を学ぶ。1896年ミュンヘンに移住しアズベ芸術学校で絵画を学ぶ。1908年までベルリンに住む。1910年カンディンスキー最初の抽象画を発表。1911年「芸術における精神的なものについて」を発表。ドイツ、パリ、ロシアで数多くの展覧会に出展。1922年6月から1933年4月までバウハウスのマスター。1925年10月まで壁装工房の主任。10月以降第1学期生のための「分析デッサン」と「抽象的携帯要素」の授業を担当。1927年以降自由絵画クラスを担当した。カンディンスキーが主張する、あらゆる分野を統合するという概念はバウハウスのプログラムにも表れている。また色彩論と形態論を通じて、1923年前後の造型に影響を与えた。1927年に始まったカンディンスキーの絵画クラスは大きな魅力であった。^[4]

註4) パウル・クレー(Paul Klee、1879~1940) スイスベルンの郊外ミュンヘンブーフゼーで生まれた。1898年ミュンヘンの芸術学部に入学。1900年から1901年の間ミュンヘン・アカデミーのフランツ・フォン・シュトックの下で勉強。一旦スイスへ戻るが、1906年ミュンヘンへ戻る。1912年ミュンヘンで第2回の「青い騎士」展に出品。1916年から1918年兵役に服す。1921年1月から1931年3月までバウハウスのマスター。1921年4月から1922年3月まで製本部主任。1922年10月から1924年までガラス絵工房の主任。1923年10月以降第2学期学生のために「平面基礎造型講座」を担当。人体スケッチも担当した。1927年10月から織物部で造形学の授業。バウハウスで芸術家としてだけでなく人格者として尊敬を集めた。^[4]

註5) ゲオルク・ムッヒェ(Georg Muche、1895~1987) ザクセン州クヴェアフルト生まれ。ミュンヘンのアズベ芸術学校で学ぶ。1915年ベルリンへ移り、表現主義の画廊「シュトルム」を中心としたグループと接触。1920年4月から1927年6月までバウハウスのマスター。1920年の夏と1921年に予科過程の授業。1920年10月から1921年4月までヨハネス・イッテンとと共にくつかの工房を指導。続いて織物部を指導。しかしムッヒェは織物部へは彼の芸術の影響を与えなかった。^[4]

註6) オスカー・シュレマー(Oskar Schlemmer、1888~1943) 画家。シュツットガルト生まれ。1903年から1905年まで象嵌細工工房で工芸デザインを学ぶ。1912年から1920年まで、途中兵役に服す期間があったが、シュツットガルトでアドルフ・ヘルツェルに学ぶ。1920年以降、自作の最初の舞台作品「トリアド・バレエ」の衣装デザインに取り組み。1921年から1929年までバウハウスのマスター。1922年まで壁装工房、1921年から石彫工房、1922年から1925年まで舞台工房を指導した。1928/29年には「人間」の授業を担当。またバウハウスの舞台を率いてスイスとドイツを巡回した。絵画や壁装、ベルリンのプロル・オペラを初めとする舞台装置に取り組んだ。^[4]

註7) ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger、1871~1956) ドイツ系の両親の元ニューヨークに生まれた。1887年ハンブルグに行き、工芸学校で勉強を始めた。1894年ベルリンのアカデミーを卒業。1906年最初のリトグラフとエッチングの作品。1907年絵画を始める。1913年ベルリンの「第1回ドイツ秋期展」に5点の作品を出展。1917年、ベルリンの画廊「シュトルム」で最初の個展。1919年5月から1925年4月までバウハウスのマスター。1920年末からグラフィック印刷部主任。バウハウスがデッサウに移転したのち、1925年から本人の希望により授業義務のないマスター。したがってクレー、カンディンスキーと異なり、バウハウスに対する芸術家としての影響は大きくなかった。^[4]

〈参考文献〉

- 1) 田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト—人とその時代、建築、工芸」オーム社
- 2) 田中辰明「ブルーノ・タウト・日本美を再発見した建築家」中公新書2159
- 3) 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
- 4) Magdalena Droste, Bauhaus 1919~1933, Taschen
- 5) Bauhaus Berlin Archiv/Berlin, Bauhaus Berlin Wein garten
- 6) Magdalena Droste "Bauhaus" Taschen
- 7) 田中辰明「バウハウス(ヴァイマル)」月刊建築仕上技術2014年8月号、文工社